



装飾古墳―死者の眠る石の部屋を彩る『黄泉の国』の美術。古代のロマン、太古の秘められた歴史、何かしら、ほの暗い神秘を予想させる。「ピカソの絵みたいでしょう」と山鹿市立博物館の轟木正斗さん。ギョロリとした目玉にも、女性の乳房にも見える凶柄。太々とした線。鮮烈な赤、赤……。山鹿市のチブサン古

墳。実際に見たものは予想に反して、千五百年を経てもなお、鮮やかさを失わず生命感にあふれていた。

「日本に仏教美術が入らなかつたら、飛鳥時代にはキュービズムが生まれていただろうと言われていたんですよ」（轟木さん談）。細部までリアルに表現することが多い仏教美術と、二十世紀にピカソらが提唱した絵画運動―唐突な取り合わせ。チブサンといい、他の、例えば玉名市の大坊古墳といい、大胆な三角文様はなるほど現代アートを思わせる。

実際、昭和三十年代末、装飾古墳の原始美術としての価値を最初に見出だしたのは、故海老原喜之助画伯ら一群の芸術家たちだと言われる。彼らの努力で、世に知られるところとなり、装飾古墳は次第に考古学的にも注目を集めるようになった。

ピカソは力強い筆致で、女性の体を、スペイン内乱を描いた。そこにあるのは、彼の人間愛だ。古墳時代の天才画家たちが描きたかったのは、死への畏怖だろうか、生への讃歌だろうか……。今ではもう作り出せない鮮烈な赤の顔料に彩られ、躍動する図文。それは私たちがすでに失った古代の生命のたぎりかもしれない……。無題の『名画』のエネルギーは、私たち現代人を撃ち続ける。

古代の生命輝くとき。